

# 第27回 フォーク・クルセダーズが遺したもの

韓国・平昌で行なわれた冬季オリンピックの開会式では、南北朝鮮の合同チームが一つの旗を掲げて入場し大いに注目されましたが、その映像を見ていて、ちょうど今から50年前、あるレコードの発売中止の記事が新聞に掲載されたことを思い出しました。

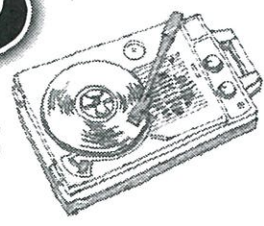
『帰って来たヨッパライ』で突如として出現し日本中を席巻していたザ・フォーク・クルセダーズの第2弾シングル『イムジン河』は昭和43年(1968)2月21日に発売予定でしたが、その直前になされた発売元・東芝からの突然の発表は高校1年だった私にとっても大きな衝撃でした。

実際は発売禁止ではなく、レコード会社による自主規制でしたが、すでに「オールナイトニッポン」などの深夜放送で多くの若者の知るところとなっていた名曲は、放送局の自粛に伴いラジオ・テレビを通じてほとんど耳にしなくなりしました。「イムジン河」を聴くことができな

くなってからしばらく経過した頃、購読していた『高2コース』の付録としてポケットサイズの青春歌集が

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎  
絵・松本 浦

ついでに「イムジン河」が発売中止となり放送されなくなった理由を知っていた私は、その曲が『イムジン河』の原曲であることを理解し、ザ・フォーク・クルセダーズと名乗るグループの歌うこの曲がラジオから流れてくるのを楽しみにしていました。

しかし、初めてその歌声を耳にしたとき、私の中でフォークルの『イムジン河』がよみがえることはありませんでした。忌憚ない言い方をすれば、繰り返し聴きたいと思うほどの魅力には欠けていたのです。

『イムジン河』の存在をフォークルの加藤和彦に伝え、同曲の詞を構成した朋友、松山猛の著書『少年Mのイムジン河』(平成14年刊、映画『パッチギ!』の原案)の中で、加藤は、次の

ように述べています。

——不遜を承知でこんなことを言う。「イムジン河」は「イムジン河」であって、「リムジンガン」ではないのである。(抄録)

加藤のこの言葉には、「イムジン河」に命を吹き込んだのは自分たちだという自負と、楽曲としての独自性への自信があふれています。

『リムジン河』の原詩作者(朴世永)は、北朝鮮の国歌を作詞した人でもあり、フォーク・クルセダーズでは北の自国PR的な表現箇所は改変されています。

その後、フォーク・クルセダーズはシリーズと名前を変え再出発します

が、新メンバーには後の山田パンダ(かぐや姫)が在籍さらに女性ボーカルとして保坂としえが加入、やがて彼女はリーダーの神部和夫と結婚、イルカとしてソロ・デビューします。「イムジン河」とイルカと「なごり雪」の幸せな繋がりです。



ほりい・るくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。著書に『私的「昭和 대중歌謡考」』第1～3集(グスコー出版)がある